

一九七七年以前出土の木簡（一五）

- 1 所在地 福井・一乗谷朝倉氏遺跡（第九次調査）
- 2 調査期間 一九七三年（昭48）八月～九月
- 3 発掘機関 福井県教育庁朝倉氏遺跡調査研究所
- 4 調査担当者 藤原武二・水野和雄
- 5 遺跡の種類 城館跡・城下町跡
- 6 遺跡の年代 戰国時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
- 一乗谷は戦国大名越前朝倉氏の城下町で、一九六七年以降発掘調査と整備が継続して行なわれている。最近では町並み立体復原など史跡公園としての整備が進んでいる。
- 調査のなかで最も注目を浴びたのが一乗谷の中心部に位置する朝倉館跡の発掘である。門・土塁・礎石建物・庭園など戦国大名の居館の全貌が我が国で初めて確認された。館内部の調査をおこして外濠の一部が発掘された。外濠は館の山側以外の三面に水濠としてめぐっている。
- 発掘調査区は、館の北側の濠の暗渠の出口の下付近に設定された。この暗渠は館の内部の排水を土塁の地中を通って濠へ排出する機能を持ち、しかもこの暗渠に至る溝は庭園・会所（泉殿）・常御殿・主殿・遠侍・上台所・台所など館内の主要な建物の間をめぐっており、これらに直接関係する遺物の出土が予想された。調査区はきわめて部分的で濠の一部分、長さ二〇m、面積一七〇m²にすぎない。検出した濠の幅は上端で八m、底では四～五m、深さは土塁基底部から三・二mであった。濠内には七層の堆積土があり、上から三層目の暗灰褐色有機質粘土層を中心として、多数の木製品がカワラケや金属製品、自然木、植物の種子、木炭、貝殻、動物遺体などと混在した状態で出土した。このうち付札をはじめとして札、柿経、将棋の駒など墨書のある木製品が三〇〇点近くあった。

今回はこの朝倉館外濠出土の墨書き木製品のうち付札二三点について報告する。これらのほとんどはすでに概報や報告書で写真・実測図・釈文が公表されているが、今回新たに釈文を再検討し、原稿を作成した。

8 木簡の釈文・内容

- | | | |
|------|--------|----------------|
| (7) | ・「▽少将」 | 56×15×1.5 032 |
| (8) | ・「▽少将」 | 61×15×1 032 |
| (9) | ・「▽少将」 | 60×18×1 032 |
| (10) | ・「▽少将」 | 59×15×2.5 032 |
| (11) | ・「▽少将」 | 58×15×2 032 |
| (12) | ・「▽少将」 | 60×17×2 032 |
| (13) | ・「▽少将」 | 58×14×2 032 |
| (14) | ・「▽少将」 | 58×14×2 032 |
| (15) | ・「▽少将」 | 108×21×0.5 032 |

(15)	•	• 「はし ○」	$(57) \times (10) \times 3$ 032
(16)	• 「▽御形 御番部屋 三番衆」		$52 \times 14 \times 1$ 011
(17)	• 「▽かん□」		$52 \times 14 \times 2.5$ 032
(18)	• 「▽□□□」		$164 \times 23 \times 3$ 032
(19)	• 「▽○ 永禄四年五月吉日 尉」		$180 \times 33 \times 2$ 032
(20)	• 「▽くらほね六口之内 ・「▽永禄三年五月廿三日中村甚介」 取次」		$132 \times 27 \times 1.5$ 032
(21)	「▽□□□ □□□ □□」		$(53) \times 25 \times 2$ 039
(22)	• 「はし ○」		

これらの付札や他の墨書に永禄年間の年号がみられるところから、この館が朝倉氏の最後の当主義景の館であることが確認された。

(1)～(8)の「少将」は朝倉義景の最後の妻である斎藤氏の女房名を記したものと考えられる。この女性の名については、『朝倉始末記』には「小少将」、続群書類從本『越州軍記』には「少将」と書かれ、日本思想大系『蓮如・一向一揆』所収『越州軍記』には「小将」とされ、軍記物の諸本のテキストに異同がある。最も流布した『朝倉始末記』による「小少将」という名がこれまで一般にいわれていた。しかし『朝倉始末記』の本文については日付や表記などに誤りが多く、むしろ『越州軍記』の方が内容が正確であることが最近わかつてきた。本木簡の記載はそうした軍記物の本文研究の成果と一致する。すなわち彼女の正式な女房名が「少将」であったことが確認された。

(13)の中程の一文字は判読不能。「おじる」は書状の宛先の脇付に使われる独特的の字体である。

(16)の「御形」はこれまで義景の妻を指すものとされてきたが、「おかた」は子の呼称でもあり、「御方」とも表記される。番衆がおかれ

ていることからみて、(16)の「御形」は朝倉義景の嫡男阿君(当時六歳)に比定される。

(17)は墨痕明瞭であるが、三字目の字画が判然とせず難読である。

当時は割合「か」と「くわ」の表記が使い分けられていたようであるから、記載内容の可能性として「罐子」「巻数」は難しい。むしろ監寺(カソゾ・カソス)ではないかと考えられる。

(22)の「はし」の裏面には上部に一文字分の墨痕があることが確認された。また朝倉館跡の調査報告書にのせる付札23には、墨書の存在は確認されなかった。

なお今回報告した二二点の付札のうち、(14)(17)(18)は水漬状態であるが、他はすべて保存処理がほどこされ、墨書の跡もきわめて良好に保たれている。

今回の報告にあたり福井県立博物館の山形裕之氏のご高配をえた。

9 関係文献

福井県教育委員会・朝倉氏遺跡調査研究所『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡V 昭和四八年度発掘調査整備事業概報』(一九七四年)
福井県教育委員会『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告I 朝倉館跡の調査』(一九七六年)

(佐藤 圭)

漢簡研究国際シンポジウム 開催さる

去る一九九一年一二月一二・一三の両日、関西大学において同大学東西学術研究所主催の「漢簡研究国際シンポジウム九二」が開催された。中国・台湾で漢簡研究に携わる九名の報告をもとにして、東洋史・日本史・書道史等の分野の研究者による活発な討論が展開された。

報告は以下のとおり。

徐莘芳「中国における漢簡発掘の現状」、初世賓「居延新簡の歴史研究に対する貢献」、岳邦湖「エチナ川流域漢代遺跡の現状」、邢義田「中央研究院歴史語言研究所所蔵居延漢簡整理工作簡報」、吳祿驥「敦煌馬圈湾出土漢簡の特色」何双全「漢簡中の符伝と過所」、李永良「敦煌漢簡中の西域史料の問題について」、彭浩「湖北省江陵出土漢簡概説」、李學勤「湖北省江陵張家山出土漢律竹簡」